
バルタンがやってきた！

ジョナサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バルタンがやってきた！

【Nコード】

N5333U

【作者名】

ジョナサン

【あらすじ】

色々と訳有のフリーター、武田次郎。彼は近くのコンビニで働き、生計を立てていた。ある日、実家の母親から捨て犬の世話を頼まれる。そして、やってきたのは犬どころか、地球の生き物じゃなかった！？

人とバルタン星人の日常が今、始まる！

この小説は、作者の悪ふざけです。

キャラクター紹介（前書き）

どうも、知っている人は覚えていてほしい、ジヨナサンです。
この小説のキャラクター紹介ですが、ネタバレが入る可能性がある
ので、

そういったものが嫌いな方は左上の「↑」をお願いします。

キャラクター紹介

武田 次郎（ただ じろう / J i r o t a k e d a）
23歳（仮）。

約5年前理不尽すぎる理由で親に勘当された、
バイトで生計を立てる青年。

高校ではなかなかいい顔だったが、
中途半端なためにイケメンと呼ばれず、
イケハンと呼ばれた。

180cm。

家事は人並みにできる。

バルタン星人（ばるたんせいじん / V a r t a n s t a r p e
ople）

この小説で登場するバルタンは1万6千歳。

筆者は10万年がバルタン星人での長寿と計算しているため、
人間で言う16歳。

ウルトラマンを知る人ならば9割以上は知っていると思う
人気怪獣（星人）。

セミのようなボディにカニみたいなハサミ。

このバルタンのカラーは黒メインに栗色ライン。

198cm。

次郎の部屋にペット（犬扱い？）として、
飼われる（居候）。

得意料理は肉じゃが類。

以下、7話

ウルトラセブン：

地球にさぼ・・・長期休暇でやってきた。本名レッドマン。
既婚。性格は比較的真面目。だが不倫目的で地球に来たとの噂がある。

基本「デュッ」で会話。たまに普通に喋る。

メトロン星人：

幻覚宇宙人。アパート暮らし

―以下、アイスラッガーでジョギンされました―

スーツの客：

メトロン行きつけのおでん屋によく来る会社員。
宇宙人。

まるで「ウルトラマン」のような言葉で話す。
それどころか、「見た目までウルトラマンのような人」である。

キャラクター紹介（後書き）

本文の文字を丁度555にしました、ジョナサンです。

第0話（前書き）

この物語は、二次創作の初心者が書いております。
その為、読んだことによる価値観の損害及び喪失については、
作者は一切責任を持ちません。

この物語には、

バルタン星人やその他に関する作者の勝手な設定が登場することが
あります。

それに違和感を覚えた方はすぐにこのウィンドウの右上の×をクリ
ックし、

履歴やCookieの削除をお願いいたします。

進行のペースによって、

ウルトラマン系統以外のキャラクターが登場することがあります。

第0話

いつも通りの日常。

それも明日で4年目を迎える。

近くのコンビニで働き始めて、もう2年か。

「ただいまー」

誰もいない部屋でただいま・・・。

・・・

自己紹介が遅れた。俺は武田次郎。ただのフリーターだ。

突然だが、3年と364日前、俺は実家から追い出された。理由は簡単だ。

親父が相当な権力者だった。

けれど、俺の才能が兄貴や妹と違って、何もなかったから、せめて俺にはいい大学へ行ってもらい、

自分の面目を守ろうとしたのだろう。

高3の秋、いきなり「東大に行け!!」と言われた。

当然俺はそこら辺の企業にでも就く気だったから

最低限の勉強しかしていない訳だ。

結局落ちた。

すると親父は、

「面汚しが！出ていけ！」

・・・アホか、クソ親父が。

「あー腹減った、飯飯・・・」

俺はコンビニから貰ってきた消費期限切れの弁当を開く。

「いただきます」

午後8時30分。

食い終わると、布団を敷く。

やる事が無いのだ。

テレビも無いし。

新聞はゴミ捨て場から拝借する毎日だ。

あーあ、クソ親父め、クソ、イライラしてきた。

・・・兄貴や妹はいいよな。

兄貴は頭脳明晰で一流企業。

妹は陸上一筋で、国体レベル。

俺は何にもないからこんな目に・・・

「あゝああああ！クソッ！！」

寝よう。親父への不満が募るだけだ。

何で俺はアイツの子供^{ガキ}なんだ・・・？

その日、夢を見た。

兄弟3人で、遊んでいる夢だ。

ああ、2人はどうしてるんだろうか。

親父に変な束縛受けてないだろうか。

電話の鳴る音で、俺は目が覚めた。

壁の時計を見る。6時ジャストだ。

「何なんだ一体・・・」

俺は近くに置いてあった子機を取る。

「もしもし」

『おはよう、ジロー』

お袋だ。

「あー、おはよう」

『うん、元気そうでよかった』

「蓮兄や可奈は元気？」

『ええ』

「そ、じゃね」

『ま、待ちなさい！』

子機の「切」ボタンを押そうとした俺を止める。

「何？こんなことしてる暇があるなら

クソ親父に説得の一回や二回して欲しい限りなんだが」

『ごめんね、ちよつと頼みがあるの』

「ほう、お袋は俺を追い出すのに反対の意思表示をしなかったな？

追い出していいってことは俺は必要じゃないってことだろ？

何を今更頼むことがある？」

『う、ごめんなさい・・・』

「・・・悪い。言い過ぎたか？

で、一応聞く。何？」

『可奈の事なんだけど・・・』

「可奈の？」

なら乗らない訳にはいかない。

仲が良かった兄弟の事だ。

俺が追い出される時も蓮兄と一緒に反対してくれたし。

『ええ、実は可奈が捨て犬を拾ってきちゃって・・・』

「いつもの事だろ？」

『で、一緒に住ませてあげてってお父さんに頼んだんだけど・・・』

『

「やっぱり断られたか？」

『で、捨てるくらいなら一緒に死んでやる！！

みたいな雰囲気で閉じこもっちゃって・・・』

「それで？」

『お願い、ジロー、

その犬、飼ってくれない？』

はあ！？

「無理に決まってるんだろ！」

大体俺は自分の暮らしで精一杯だったのに」

犬一匹でどれだけ疲れると思ってんだ。

『そこを何とか！なんなら飼育費は家が出すから！
そのアパート、ペットOK何でしょ？』

「OKだが・・・！」

『じゃ、お願いね！配達頼んじやったから！』

「オイ！」

『可奈を助けると思って！それじゃね！

多分今日中に届くから！』

「待てコラ！！」

ぶっ。

切られた。

「・・・・・・クソ」

・・・仕方ない。

人のいい妹を助けると思って・・・。

少々納得できないが、仕方ない。

こうして、俺は捨て犬の世話を引き受けることになった。

第0話（後書き）

思いつきで書いてしまったこの小説。

まだほかの作品終わってないのにね・・・。

止めるかもしれませんが、宜しくおねがいます

第1話 注・これって、不法侵入にならないかな？（前書き）

この小説はアああ

初心者がかいてえおりますう故。

至らないところがあっても突っ込んではいけません。

なお。作者はほかの小説の執筆を優先します。

この小説は、気分です。

第1話 注・これって、不法侵入にならないかな？

フリーター生活も今日で5年目に突入した。

5年か・・・遠いようで短かったな・・・俺の日々。

そして、今日も平凡に出ることになるのだろっ、コンビニへ。

第1話 バルタンがやってきた！

「先輩、今日早いですね」

バイトの後輩、風児ふうじが意外そうな目で見える。

「ああ、今日はお袋が荷物を送ってくるんでな
半ば強制的に。」

「店長にも話はしてあるから。
じゃな、お疲れ様」

バイトを早めに切り上げ、コンビニを出る。

・・・犬、か。

俺も小学校の時、蓮兄と一緒に捨て犬を隠し飼ってたな。

そのたびクソ親父に見つかって、

見せしめに1匹を殴り殺されたのは流石にトラウマだ。

それもあった、俺はできれば犬は飼いたくない。

あの時の光景が蘇りそうだからだ。

家についた。荷物は・・・まだ来てないな。

・・・あー、寒。早く入ろう。

がちゃ。

「ただいm・・・」
ばたん。

・・・。。。

中に何か居た。

・・・俺の家、だな・・・。

・・・。

がちゃ。

「お前何モンだー！ー！？」

俺の部屋のはずだった。

しかし。

そこに明らかに人でないものが入っていた。

第2話 初めまして（前書き）

この小説は初心者が書いています。
内容には期待しないでください

この小説は、ウルトラマン好きな方にダメージを与える恐れがあります。

第2話 初めまして

帰宅直後、謎の生き物を待たせて
(ちよつと待ってて、と言ったら、「あ、はい」と返してきた)、
俺はすぐさま母親に電話を掛けた。
少しして、つながる。

「もしもし、お袋」

『あ、ジロー？ワンちゃん届いた？』

「届いてないぞ、ワンちゃん。」

地球外の生き物なら届いたが」

『地球外のとて・・・そんなわけないじゃない。
ちゃんと犬種だって分かってるんだから』

「・・・一応聞こう」

『可奈が「バルタンセイジンって言うてた」って』

その時点でもう犬じゃないじゃないか！！

『とにかく飼育費はあなたの口座に振り込んでおくから！

じゃね！お父さん帰ってきてるの！』

「あ、コラ！」

ピッ。

・・・さて、これからあの生き物と暮らすことになったわけだが・・・

バルタンセイジン・・・バルタン、星人？

「あの」

ハスキーな声で、バルタン星人は言った。

「・・・はあ。」

仕方ないか。

俺は武田次郎。

ご覧の通り、ただの一市民。お前は？」

そう言うと、バルタン星人は、

「バルタン星人です。バルタンと呼んでください」
礼儀正しく頭を下げるバルタン。

「とりあえず今んとここがお前の家だ。
楽にするといい」

「ありがとうございます」

こうして俺と、バルタン星人の生活が始まった。

エピソードみたいなもの

あの数日後、俺はバルタン星人について、調べてみた。

バルタン星人。言わずと知れた、ウルトラマンの敵として現れた
宇宙人である。

セミのような姿をしている。

そして、分身、テレポートなどを行えることから、
宇宙忍者とも呼ばれているらしい。

第2話 初めまして（後書き）

2話目。3話から本番の予定です。

第3話 ご飯の時間にしてやろうか

「初めまして、バルタンです、これから宜しくお願いします」

「あらあら礼儀正しいこと、よろしくね」

「・・・アパートの人に挨拶するって言ってたが・・・」

大家さん！そいつ宇宙人！バルタン星人！

さつき会った人も何普通に「こんにちは」って言ってるんだ！？

と、言うわけで夜になった。

バルタンはちゃぶ台の前でお笑い番組を見ている。

「・・・面白いのか？」

「・・・ぶ、くく・・・」

な、こいつ・・・笑ってやがる・・・！

って、驚くほどの事でもないか。

多分コイツの母星でも、こんなのはあつたはずだ。

いつもならコンビニの弁当の余り物を持つてくるのだが・・・

今日は事情がため（主に急な居候）によつて、無い。

「しょうがない、料理するか・・・ん？」

そして、ふと重大な疑問が浮かんだ。

（此奴^{バルタン}、何食うんだ！？）

・・・冷蔵庫の中身を見る。

とりあえず何か食べそうなもの・・・

えーと、卵、豚肉、サバ・・・あ、サバ消費期限切れてる。

・・・まあ、煮るなり焼くなりすれば大丈夫だろ、

って、そうそう。バルタン星人が食えるものだったな。

「バルタン」

「はい？」

バルタンはちゃぶ台の前から立ち上がり、こちらに来た。多分何も知らない人にやつたらかなり怖いだろう。

・・・あ、大家さん。

急に大家さんの顔が浮かんだ。ような気がした。

「なあ、お前って、何食うんだ？」

「何を食べるって・・・アレに決まってるじゃないですか」

「アレ？何だ？」

「お米ですよ米」

お前本当にバルタン星人か！？

「日本の心ですよお米は」

宇宙人が日本の心を語ってほしくない。

「それと、僕はお肉とか好きですね、特に牛」

セミみたいな外見でそれか。

どう見ても肉食には見えない。

「分かった。とりあえず米はサ○ウのあるからそれにしよう。
で、サバあるからそれで」

こうして、俺とバルタンの初めての食事だ。

「「いただきます」」

白飯に端を付ける。

・・・うん、旨い、普通に。

・・・俺はチラッとバルタンの方を見た。

・・・！！？

な、なん・・・だと・・・！？

箸を・・・その手でもってやがるッ！？

「・・・？どうかしたんですか？次郎さん」

「いや、別に」

そしてその箸の先のサバを・・・

・・・！？どうやって食ったんだ！？
見えなかったぞ！？

疑問の多い食事だった。

次の日、俺は腹を壊した。

第3話 ご飯の時間にしてやろつか（後書き）

あとがき遅れました、ジョナサンです。

これから俺のバルタン星人に関する勝手な妄想が飛び出します。
ご注意ください。

第4話 放置した期限切れのサバは食べた者に腹痛を与える（前書き）

この小説はウルトラマン好きの方に
ある種のPTSD（心的外傷後ストレス障害）を残す可能性があります。
ます。

知るかよ、ズンドコド

という人のみ先へお進みください。

第4話 放置した期限切れのサバは食べた者に腹痛を与える

「あ、次郎さん、こんにちは・・・って、どうしたんですかその顔！？」

風児ふうじが裏口でゴミを出そうとしていたところに昼から来た俺とばったり会った。

「・・・サバだ。期限切れのサバ食ったら体調崩した」

「ああ・・・だから今日昼からなんです」

とりあえず今でも腹が痛い。

今日は早めに上がらしてもらおう。

3時間ぐらいで後を店長に任せて、先に帰宅することにした。そして、俺の部屋の前。

「あ、お帰りなさい、次郎さん」

バルタンが左手にひだりハサミ、右手にみぎハサミに塵取りを持っていた。

「ああ、ただいま・・・って、何してんだ？」

「掃除です。僕としては何か住まわせて貰ってるのに何もしないのは悪いかな、と」

すごく出来てる性格だな。

「あ、あと、部屋にゴキブリ居たので退治しておきました」
「すごく気が利く。何だこの宇宙人。」

「部屋の中も掃除しておいたの」

もう完全にお手伝いさんと変わらんよ、コレ。

部屋も埃つばさが出た時より感じられない。

さらに部屋に置いてあったものは簡単にまとめられている。

勝手に片づけられるより、これなら分かり易い。

「おおー・・・有難うな、ばる——」

だが、そこで、俺はあるものを見つけてしまった。

・・・あれ？窓ガラスがない・・・？

「なあ、バルタン」

「何ですか？」

玄関掃除を終えたのか、バルタンがこっちに来ながら返事した。

「この部屋、窓ガラスあつたよな？」

「ぎく」

・・・あからさまな反応。

「おまけに何か窓枠に結構な穴がいくつか空いてるんだが」

「ぎく・・・あ、空いてましたよー・・・？」

「おまけに何か外見ると小さい鉄の塊みたいなものがあるんだがな
ー」

「・・・す、すみませんでした！ー」

やっぱりか。

「何があつたんだ？」

「実は・・・」

『よし、掃除でもしよう』

カサカサッ。

『あ、ゴキブリ！』

カサカサカサッ。

『逃がしません・・・』

「で、つい、コレを・・・」

そういつて、バルタンは両方のハサミを大きく開けた。ら・・・

ガシャ！ウィーン、ギュルル

中から・・・「ガトリングガンのようなもの」が、現れた。

「・・・」

「す、すみません・・・」

「・・・よし、そこに正座」

バルタンへの説教と、反省文を書かせるのと、
ガトリングガンのようなものを外させるので、
不幸中の幸いか、
怒りで俺の腹痛は止まっていた。

第4話 放置した期限切れのサバは食べた者に腹痛を与える（後書き）

安っぽい文ですみません、ジヨナサンです。

さて、この小説・・・

ウルトラ一族登場しないはずでしたが、

やっぱり何人か出すことにしました。

何話かした後に、出す予定です。

果たして、誰が来るのか・・・楽しみに。

第5話 人当たりがよければどんな理由でも大抵好かれる

バルタンが俺の所に来て1週間……

何故だ……

「あら、バルタンさん、こんにちは」

通りがかった人から挨拶をされるバルタン。

「こんにちは、田中さん」

律儀に名前覚えてるし。

……何でこいつ、町内の人と馴染んでるんだ!?

今日は日曜。よってバイトは昼まで。

と、言うわけで、家にいても何もすることがないので、近所をうろついてる訳だ。

5時間ぐらい。

……おかしいとか言うな、俺は暇人なんだから。

「平和ですねー次郎さん」

……この、異常な居候ベットと共に居るのも慣れてきた。

「あれ、何か言いました?」

ナレーションを聞き取るな。

「別に」

しかし突っ込むと終わりのような気がしたのでやめておく。

「こういう平和なのって、いいですよね」

「そーだねー」

しかし、全然不思議がられたりしてないなコイツ。
写真位撮られてもおかしくないと思うんだが。

「・・・ん？」

少し前のスーパーが騒がしいのに気付いた。

特売日でも何でもやってるんだろうか。

入ってみる。

「タイムサービスですね」

バルタンが言った。

「何でわかるんだ？」

「夕方の時間帯は朝売られた生ものが安くなるのは
どこでも一緒です」

なるほど。

ホント人間味の絶えない宇宙人だ。

「獲ってきましようか？ いいのを」

「獲れるのか？」

確かに獲れそうだ。

近くにガトリング弾の2、3発を打ち込めば・・・
って何を考えてるんだ俺は

「余裕です」

自信たつぷりにバルタンが答える。

「一族が宇宙忍者と言われる所以^{ゆえん}を見せてあげます」
バルタンはそう言つて人混みに飛び込んだ。

10秒もかからず、

「どうでしたか？ 獲れましたよ半額のサバ」

「ああ、すごい。確かにすごいな。でも・・・それ以上に^{ずる}狡いな」
獲れてきたにはそうなんだが、こいつは・・・

レポートしやがった。

背が高いので、何処にいるかは分かっていた。

で、パツとコイツの頭が消えて、別の所に現れたんだから。

「じゃあ、今日の夕飯はサバですね」
「サバ、かあ・・・。」

第5話 人当たりがよければどんな理由でも大抵好かれる（後書き）

あまり面白くない・・・と、読み返しました、ジョナサンです。
すみません。キャラ不足なんです。

と、言うわけで近いうちキャラ
追加します。

第6話 あの手サミ 切るんだろつか 食材を

b y次郎（前書き）

この物語は、ウルトラマンのファンの皆様に、
多大なトラウマを残すことがあるかもしれません。

上の文は気分書いています。

第6話 あの手ハサミ 切るんだろうか 食材を

b y 次郎

「今日は僕がご飯作ります」

・・・。

「さーって、外食かー」

「無視しないで下さいよ！」

クツ！無視では逃げ切れんか！バルタン星人の料理・・・何か人間では食えないものの予感がするツ！？

「心配しないで下さいよちゃんと作りますからー」

そんな泣きそうな声で言われてもそんな声じゃあ可愛げもない。

「僕これでもご近所さんに上手って言われてるんですよー！肉じゃが！」

「じゃあご近所さんって誰だ」

「大家さん」

大家さああああああん！！

「ふふ」

最近流行りの曲を鼻で歌いながら（鼻って何処にあるんだろうか）、バルタンは台所で手^{ハサミ}を動かす。

本当にコイツ宇宙人なのだろうか。実は着ぐるみってことはないだろうか。

ピンポン

と、誰か来たようだ。

俺はその場から離れた。

「武田さん、実は今度このアパートにご新規さんが来るのよ
いい年したおばty・・・大家さんが言った。

「武田さんのお隣さんだから、仲よくしてあげてね」

「あー、はい」

まあ珍しいこともないだろう。

「多分4、5日あとか次の話辺りに来ると思うから」
大家さん！メタ！それメタ！！

「できました」

俺が大家さんと2、3分ほど世間話をしている間にできた。とうとう飯の時は来た・・・。

なんかコイツ早いな、調理が。

「どうぞ、うまく出来ましたから」

小さめの鍋を手で器用ハサミに持って、卓袱台ちゃぶだいまで持ってくるバルタン。

・・・開けるぞ・・・。

俺が別の意味で緊張しながら、鍋の蓋を開ける・・・。
中から出てきたのは

カレー臭・・・？

いや、これは・・・、カレー肉じゃが！？

学校の給食などに出てくるような肉じゃがのカレーバリエーション

が出てきた。

食欲をそらせるいい匂い・・・だが、
まだ味は分らん。

「さ、食べましょうか」

バルタンは俺の反対側に座った。

「いただきます」

・・・いざ、実食・・・！

「旨い・・・だと・・・！？」

「本当ですか！？よかったです」

嬉しそう(?)なバルタン。しかしこれは普通に美味しい。

ヨネ〇ケに食わせてもおかしくないレベルだ。

とりあえず俺が言えることは一つ。

「お前いい嫁さんになれるよ」

「？」

いまいちの反応であった。

第7話 デュッ

・・・ああ、確かにご新規さんが来るって分かってたよ。
お隣さんだって分かってたよ。だがな。

「・・・よろしくお願いします」

「デュアッ」

・・・・・・お隣さん人間じゃねえ！！

数分前

「？次郎さん、何で時計チラチラ見てるんですか？確か今日アルバ
イトは昼でしたよね？」

何で俺のスケジュールを知っているんだお前は。

もうバルタン星人との共同生活にも慣れてきた。いや、慣れなきや
おかしい。

このバルタン、ある種の人間よりよほど人間的だからだ。

ケ○口軍○とか、田○太○とか、そんなもんじゃない・・・はずだ。

「ああ、実はこの前大家さんが来てな。今日うちの隣にご新規さん
来るんだよ」

「へえーっご新規さんですか」

コイツからは表情がわかりにくいけど、多分興味津々だ。

「でも、お前は出てくんなよ？ご新規さん腰抜かすかもしれないか
らな」

「？ どうしてですか？」

「見た目だよ！お前の見た目！どこからどう見ても知らない奴にはただの化物にしか見えない！」
バケモン

「ひ、酷いですよ！そこまで行きませんよ！近所の人は普通に接してくれます！」

それは多分、近所の人たちが寛容過ぎるだけだと思う。

「・・・まあ、挨拶はまた今度にしろ。遠い所から引っ越してきたらしいから、

肝が小さいかもしれん」

と、言った直後だった。

ピンポーン

「お、来たみたいだな、じゃあ大人しくしてろよ」

そう言つて、俺は玄関へ行つた。

「・・・・・・」

俺は絶句した。

「・・・・・・」

「・・・遠い所から来た、とは言われてたがな・・・

「あー、初めまして」

「デュッ」

・・・。

「・・・よろしくお願いします」

「デュア」

4月某日。

俺のお隣に、ウルトラセブンが引っ越してきた。

第7話 デュッ (後書き)

7登場。ジヨナサンです。

本来これには超男の人たちは出さない予定でしたが、俺の個人的な事情によって、出させていただきました、7さん。ダンの姿じゃないのは、そっとおいてください。

第8話 御呼ばれ

「・・・」

とりあえず状況を説明しよう。俺、いや、俺たちはセブンの部屋にいる。

新居記念として、隣部屋の俺が御呼ばれたのだ。

何かまかない料理してくれるらしいが、何を作るのだろう・・・。

バルタンの先入観よりはセブンは上手そうに見える。と、思っていたのはさっきまでだ。

「何なんでしょうか、楽しみですね」

・・・バルタンよ。お前はアレを見てもそう言えるのか。

何か怖い感じに必殺武器研いでるんだが！？
アイスラッガー

第8話 御呼ばれ

セブンはアイスラッガーを研ぎ終わると（普通の砥石で研いでたが大丈夫なのか？）

おもむろにそれで大根を切り出した。

『かつら剥きもせず！』

「楽しみですね」

バルタン、お前の眼は節穴か！？ピーラーまな板の横に置いてあるのにそれか！？

そしてさつき洗ったとはいえ怪獣のあらゆる部分を切断してきたそれは衛生的にどうだ!?

「・・・デユア!？」

あ、皮残ってるのに気付いた。急いで皮むきを・・・や、だからピラー使えよ!

「次郎さん次郎さん」

何かに気付いたようにバルタンが言う。

「どうした」

「セブンさんかつら剥きすごく上手です」

あ、ホントだ、透けて見えるくらいに薄い。

そして、暫く大根と向かい合っていたセブンだったが、とうとう面倒臭くなったのか、

鍋の中に適当にスーパーで買ってきた具材をぶち込む。

そして水やら醤油やらを入れて、煮だした。

「・・・なあ、すごい心配なんだが」

と、不安交じりにバルタンに言ってみると、

「え?美味しそうな味噌汁が出来そうですけど」

お前は何を見てたんだ!?!味噌の要素全く無いぞ!?

結局、セブンが作った「おでん」を食らうことになったが、俺はあまり胃に入らなかった。

味は不味くはなかったが、旨くもなかった。

第9話 今回はサザ○さん式（前書き）

この小説は初心者が書いています。

呼んだことによる価値観の損害に対しては一切責任を取りません。

今回は新境地に挑戦し、3本立てという俺自身の精神的によろしくない設計となっております。

第9話 今回はサザ○さん式

「さて、俺はそろそろバイト行ってくる」

平日の午前9時、俺はバルタンにアルバイトに行く旨を告げた。というのも大げさな言い方だが。

「はい、いつてらっしゃい」

古臭い掃除機を畳にかけながら、バルタンは言った。

そして俺は部屋を出て2秒、階段に差し掛かったところで硬直するとは思わなかった。

第9 - 1話 うしくん!!

・・・なんだコイツ。このアパートの前の、ゴミ拾いをして
いる牛のバケモンは。

「うん」

訳の分からん歌を鳴き声で歌いながら、アパート前のゴミを拾って
は家庭用のゴミ袋に入れていく。

「・・・・・・・・。」

よし、かかわらんようにしよう。バイトまでにまだ時間はあるが相
手にするとかかなり面倒臭くなりそうだ、うん。

俺がその牛をスルーしようとした時だった。
のうなものの

「デユー!!」

セブンが現れた。

ビジネスバッグを片手に。

「・・・ど、どうも」

相変わらず何を言っているのかが分からない。対応に困る。

「ジユッ」

あ、牛のようなものに近寄って行った・・・

「~~~~」

「デュあ」

何を話しているのか分からない。

「デュ」

あ、セブンこっち来た。・・・牛と一緒に。

「デュッ」

「あー、なんですか」

セブンは俺の反応に少し考えるような仕草を見せた。そして、

「・・・デッ、ジャアッ」

ジェスチャー、だろうか。だがしかしよくわからない。

再び考えるセブン。

「~~~~」

あ、牛が何か言ってる。

「デュっ」

何かまとまったようだ。

セブンと牛がこっちへ向いた。

そして――

「ハジメマシテ、ワタシ、ミクラス、イウ」

「牛が喋るんかい!!」
おまえ

牛・・・ミクラスといったそいつが、普通に(?)日本語を話した。

つい、普通に突っ込んでしまう。

「キニシナイ、ゴシュジン、アンマリ、ニンゲンゴ、ツカワナイ」

「あ、ああ」

「ワタシ、ゴシュジン、セブンノ、ペット、ツマリ」

「つ、つまり？」

「ポ○モン」

「色々と危ない!!」

「ジョウダン、カプセルカイジウ、イウネ」

カプセル怪獣、なあ。

ウィ○ペディアで見たことがある。

たしかセブンはよく変身アイテムを無くして、それで代わりに戦ってもらうとか。

「ワタシノ、ナカーマ、チーキュニ、2ヒキイルアルネ」

何か脱線してきている上に、段々と牛の話し方^{ミフラス}が中国人っぽくなっ

てきている。

ここで俺は切ることにした。

「あー、俺は武田次郎。隣の部屋だ、よろしく」

チンドウオクエンジャオ
「請多关照（よろしくね）」

とうとう中国語になった!!

ミクラスとのコントじみた初会が朝にあった、その日の夕方。

「ちよつと武田さん、お願いがあるんだけど」

大家さんだ。ご丁寧に俺の部屋の前にいた。

「な、何です？」

瞬間的に嫌な予感を察知した。バルタンが来てから大家さんが関わることは面倒臭い。

「実はね、もう108号室の人が家賃3か月滞納してるのよ、武田さんからも何とか言って」

「えー・・・」

ほらね。

でも、俺も家賃を一月待ってもらった借りもある。

ここで返しておくのも悪くはない。

「・・・分かりました、俺からも言つときます」

108号室の人とは話したことがない。

というか、俺はバイトとかがあるので、見たこともない。

ピンポン、と、俺は古臭いホーンを慣らす。

『へーいへいくださいまー』

と、中年臭い声がする。その後、ガチャ。と木造の扉が開いた。

「家賃ならまだですよー・・・って、なんだ、違うのか」

・・・。

「ん？どうしたー？」

・・・ああ、今回のタイトルからも、大家さんに頼まれた時から、分かってたさ。

「きいてるのかー？オイ」

幻覚宇宙人メトロン星人。

セブンのwii見たときのそれが、目の前にいた。

「まあ座れや」

メトロンに促され、俺は卓袱台を前に座る。

このアパート、とりあえずの家具や家電は置いてあるので便利だ。卓袱台も俺の部屋に同じものがある。

「で、何の用だし」

「あ、はい。大家さんがそろそろ家賃払え、と」

「何だ催促の手伝いか・・・」

細長い何かひよろひよろした指で、タバコを吸い始めるメトロン。

「いいか？俺だって払いたいさ。だがな。俺の月収は10万あるかないかなんだよ。」

それでこの家賃払うには普通に稼ぐには無理ってわけだ。

多少賭け事に足を突っ込むしかないんだよ、分かるか？え？」

・・・多分この小説で最も長い一度のセリフの文字量だった。

「はあ」

とりあえず適当に相槌。

「で、今回も『パチンコ ウルトラセブン』でボロ負けだよ、おまけに競馬も予想屋10人回って外れた」

そりゃあ賭け事に関わると碌ろくな事ないしな。

「と、言うわけで金貸してくれ」

えー・・・。予想外デス。

「ほら、うまくいけば倍返しするからさ」

「え、いや、あの」

と、無理強いされだした、その時だった。

「ジュアア！！」

勢いよくドアが開く。

駆け込んできたのは・・・ウルトラセブン。

「ゲッ セブンはなぜここ・・・お？」

直後、メトロンをがし、と掴む。

そして、セブンは片手で窓を開けた。

「え・・・ちよっ・・・おま」

焦るメトロン。

セブンは――

「うお・・・らああああああ！！！！！」

勢いよく雄叫びを上げ、窓の外にメトロン星人をぶん投げた。
更に、

「じえああああ！！！」

頭から必殺武器をむしり取り、宙を飛ぶメトロ^{アイスラッガー}ンに投げつけた。

「ギヤアアアアアア」

お約束通り、というか、頭頂部から股間まで真っ二つになるメトロ
ン星人。

止めと言わんばかりにセブンは腕を構え、

「ぶっ飛ばええええええええ！！！！！」

ワイドショット。

二代目バルタン星人を葬るがごとく、
二つに分かれたメトロン星人に当てた。

そして メトロン星人は 爆散した

「・・・」

「・・・」

一瞬のうちに起こった出来事に啞然とした俺。

「あの・・・セブン？」

「デユ？」

戻ってきたアイスラッガーを頭に付けながら、「？」を浮かべるセ
ブン。

・・・さっき、普通に喋ってなかったか？

夕焼けに散ったメトロン星人は、儚くも、美しくあって・・・欲
しい。

第9 - 3話 バルタン側から。

「あ、花火」

バルタンは夕方のニュース番組を、茶をすすり見ていると、夕焼け空に破裂音と共に小さな光が走ったのを見た。

バルタンは、それを花火と取った。

「まだ春で夕方なのに、気の早い人っているんですね・・・」
誰ともなしに、バルタンはつぶやく。

「夕焼けって、いいですねー」

呑気なバルタン星人は、今日も平和に、家主じゆうの帰りを待つのだった。

第9話 今回はサザ○さん式（後書き）

今日はサザエさん式で行こう。

ちび○子ちゃんを見て、なぜかそう思った、ジョナサンです。

今回、メトロン星人が爆発しましたが補足します。

まだ生きてます。理由は問わないでください。

第10話 タイトル考えるの面倒臭いな（おい（前書き）

この小説は・・・まあ、アレです、初心者です。

第10話 タイトル考えるの面倒臭いな（おい

バルタンとともに卓袱台の鍋をつつく。今日は久しぶりにスーパーで食材が多めに手に入ったからだ（主にバルタンの分身・テレポーター・流水の動き（？）によって）。

鍋なんて月に1度できるかどうかだからな。じっくり味わおう。

「美味しいですねー次郎さん♪」

相変わらずハサミで器用に箸を持つバルタン。

「時に次郎さん」

「何だ？」

「ポン酢派なんですねー」

「そうだが？」

「僕は醤油派です」

「へー」

・・・

「時にバルタン」

「何ですか？」

「俺の丁度斜め45°に座っている、そいつは誰だ？^{なん}」

壁に長身の機械みたいなものが、ちょこん、と可愛らしく体育座りで座っている。

というわけでもなく、見下すような感じで胡坐^{あぐら}をかいていた。

「で、サブタイ挟んだところで、何あれ」

鍋が空っぽになったところで、ロボットを指差した。

「買い物の帰りに拾ってきたんです、倒れていたの」

「ああ、それで『先に帰っててください』と・・・」

しかしパツと見たところ、どこかしら壊れているというわけでもない。

「しかしよく出来てますねーこのロボット。まるで地球のものじゃないくらいに」

「そうだなー、それになんか生きてるみたいだし」

「ああ、そやな」

「このおでこのランプ何なんでしょうが。点滅してますが」

「それは俺のビームランプや」

「何か梅干し食った後の口みたいな目だな」

「誰が梅干しじゃい!!」

「バルタン、何か言ったか？」

「・・・? いえ」

「俺や!俺が言うつんのや!」

「うお(うわ)!?」

俺たちは仰け反った。そのロボットが喋っている・・・!

「次郎さん!何か喋ってます!何か怖いです!」

バルタンに関しては俺にくつついてくる。あんまり嬉しくない。これが可愛い子なら(r y

第一お前も「何か喋ってる!怖い!」に当てはまる。

とりあえずこのロボット?に聞こう。

「誰だお前は」

「俺か?俺は・・・・・・」

・・・・・・

「……その前に充電さしてくれへん？」

「予備電源結構短いんや」

「これが喜劇かなんかなら、「今の間なんやねん！」と、ずっとこけた後に言うべきだが。」

「どうやって？」

「次郎さん、なにかこのロボットから伸びてますよ」

「ん？」

「コンセントだった。」

「簡単なアスキーアートでは――」とでも表記しようか。分かり易いかどうかは問うまい。

「というか、さっき地球の技術じゃない、みたいなこと言ってた気がするが、」

「このコンセントの形、古臭くてどう見ても日本の技術である。」

「ちよつと伸ばして壁の2つ穴に挿す。」

「おおきに。助かったわ」

「よつこいしょ、と言って、ロボットは立ち上がった。」

「動きましたよー、と、バルタンがやや拍手している。パチパチとは鳴らずカンカンと鳴っているが。」

「助けてくれてありがとな。俺はウィンドム。見ての通りロボット怪獣や」

「自己紹介をするロボット怪獣。ロボットなのに獣とはこれいかに。」

「僕はバルタン星人です。バルタンで結構です」

「反射的にだろー、すぐにバルタンも。」

「武田だ。で……どういいうわけで道に落ちてたんだ」

「へえ、実は……」

「ウィンドム、ショウユキラシタネ、カッテクルアルネ」

「えー、やや。クソかつたるいもん」

「サツサト、イクアルネ！」

「え、ちよつと待ってや！」

「ゴシユジン、カエルマデ、カッテクルアル！」

「ま、まだ充電が・・・ギャー」

「てなわけで追い出されたんや」

「そんなことが・・・」

「て言うか、お前もしかして」

コンコン。

玄関の方からノックの音が・・・

「タケダサーン、ミクラスネー。ウチノニートソツチニイルアルカ
ー？」

ミクラスが来た。

「あ、やば、醤油買ってへんわ！俺が居る事黙っというて」

「あ、ああ・・・ん？バルタン？」

バルタンがいつの間にかいない。

ガチャ。

「あ、ミクラスさーん、どうもー」

「オウ、バルタンサン。ニートキテルアルカ？」

「にー・・・と？ああ、ウインダムさんですか」

「ゲッ！？」

バルタンがばらした。俺は悪くねえ。

「コラウインダム タダデサエニチジョウヤクニタタナインダカラ、

オツカイクライヤル

「や、はは・・・でもミクラスさん、俺、バッテリーが・・・」

g a n n !

「ぎゃふん」

ミクラスが一撃。ウィンダムを気絶させる。

「シカタナイアル。ワタシガカツテコヨ」

「あ、待ってください。良かったらお分けしましょうか？」

バルタンがミクラスを呼び止めた。相変わらず人が良い。俺の醤油だが。

「イイアルカ？アナタイイヒトネー」

「いえいえ」

奇妙？な関係が生まれた瞬間であつた。

「ふー、今日も疲れたわー・・・」

ヘルメットを持つうねうねした指。

「前話は酷い目に逢ったわー・・・」

彼はメトロン星人。

今はただ、地球侵略もあきらめたフニーターである。

第10 - 2話「とあるおでん屋の話」

「おやじー、いつもの加減で大根頼むわ」

メ「メトロンは「おでん」と暖簾のれんの下がった屋台に座った。
無言で店主は鍋に箸を突く。
そんな中、もう一人客がやってきた。

メ「お、アンタかい」

客「シユアッ」

メ「アンタもよく来るよな、嫁さんもいるってのに」

客「ヘッ」

メ「ああ、すまんすまん。赴任中だったな」

客「シユア」

店主「（無言で頷く）」

メ「俺もこの前は散々だったぜ。久しぶりに嫌な奴に会っちゃまってな。

出会い頭一発もらっちゃまった」

客「ヘア」

メ「両断した後光線で撃たれたんだ。痛いなんてもんじゃなかった」

客「ヘ」

メ「そうか・・・アンタもそんな経験があるのか」

客「シユッ」

メ「なるほど。辛い思い出だったな・・・。悪かったな、思い出させちゃって」

客「シユアッ」

メ「よし、今回は俺がなけなしの給料からおごってやるよ、詫びだ」

客「ヘア」

メ「アンタそれいくか。抜け目ないな、ヘヘ」

こうして夜は更けていく・・・

第11話 あなたの風邪に狙いを決めて（仮）

「うーん・・・ん？」

俺は何かを感じ取って、目が覚めた。窓から差す光は、まだ小さい。そんな薄暗い中、俺は目を覚ました。

「（えー・・・今何時だ）」

布団に入っていた手を上に伸ばし、目覚まし時計をつかむ。
「・・・」

午前4時30分。アラームが鳴る2時間も前だ。

「とりあえずもうちつと寝るか・・・んあ？」

二度寝しようと寝やすい体勢になろうとしたときだった。

「（下半身が上手く動かない）」

足に何かが絡みついているようだ。

「・・・（ごくり）」

何かがいる。しかも分かりにくいが、確実に動いている。

意を決した俺は、自分の布団をバツと、めくりあげた・・・

そこには、うつすら人影が・・・

「うーん・・・ん・・・？」

謎の違和感を持ちながら俺は目を覚ました。

「（んー・・・今何時だ）」

布団の中の手を上に伸ばし、目覚まし時計をつか・・・

「（あ・・・？）」

いつもの場所に場所にそれはなかった。

何故分かるのか、というのは、そうだったから、としか答えられない

い。

外もいつもの朝より異様に明るい。

「・・・つうー・・・」

体がだるい。

それに心なしか頭痛もする・・・。

「・・・やっちまつてるなー・・・これ」

俺がアパート暮らしを初めて5年と少し。

午前11時。

俺は久しぶりに風邪をこじらえた。

第11話 あなたの風邪に狙いを決めて（仮）

「あー、もしもしー・・・店長」

「武田か。どうした？」

「すみません・・・今更ですが、今日休みます」

「あー、その話はいい」

「え？」

「お前んちから手伝いが来た。今日はいい」

手伝い？・・・あー。

「今日の給料は・・・なんてったか。とりあえずセミ夫に渡してお
く」

「せみつ・・・」

吹き出した。バルタン星人を・・・！セミ夫って・・・！

「その様子なら明日には大丈夫そうだな。じゃあな。さっさと治し
てとつと来い」

プツ。

「そう言えば平日に一日暇になることって全然なかったなー・・・」
バルタンが作っていったと思われる朝食（いま食べるのなら昼になるかも知れないが）を食べた後、布団に横になった。

・・・

「だめだ、落ち着かない」

風邪を引いているのにウロウロ動きたくなる。ありがちな事だろう。

「テレビでも点け・・・」

ピンポン。

ん？誰か来た。

「開いてるぞー」

そう言っていると、ガチャ、と音を立てて扉が開いた。

「デュッ！」

お隣さんが現れた。多分見舞いに来てくれたんだろう。

「オジャマスルアルネ」

ミクラスも続いて現れる。セブンだけでは何を言っているか分からないので助かる。

「ジュア（訳：様子を見に来ました）」

「ああ、大丈夫、軽い風邪だから」

「デュッ（訳：念のため熱計っておきましょう）」

「あー、いや、いいよ。さっき計ったしさ」

ちなみに38度。普通に熱である。

「ナニカ、ホシイモノアツタライウアルネ（訳：デュッ ジュア）」

「いや、セブンはそれやらなくていいから！！」

あまり突っ込ませないで欲しい。喉から来る風邪じゃないが、熱が上がりそうだ。

一方バルタン……

「て、店長……あれ、何です」

午後からのシフトで、やってきたバイトの高校生が若干引いた。

「ああ風児、あれか。風邪引いた武田の影武者だ」

「影武者って、どこの武田さんですか……」

謎の生き物……というか、バルタン星の人間のようなものが、陳列されている商品を並び変えていた。

「どこの武田って言われても次郎の武田としか言えんな」

鼻歌を歌いながらテンポ良く作業をこなしてゆく謎のバルタン星人。そして不思議と客は気にも留めない。子供に指は指されていたりするが。

「正直なところ、本気出した武田くらい働くから、かなり役立つな。

ゆっくりサボれる」

「はあ……」

「ちよつと誘ってみるか……」

「んー、大分マシになったな」

熱を計ると37度半。我ながら凄い免疫力だ。

「ただいま帰りましたー」

レジ袋をがさがさ言わせ、バルタンが帰ってきた。

「おかえり」

「すぐご飯作りますねー」

有り得ない位家庭的なバルタンだな、つくづく。

「とりあえず、雑炊の材料買ってきました。消化にもいいですし」

某おでん屋――

「・・・いらっしやい」

「ヘア」

「お、また来てるのか。あんたも物好きだな」

メトロンはのれんをくぐると同時に、「親父、いつもの大根」と言った。

「シユア」

「あん？竹輪好きなのか？まあ、なんか切った竹輪好きそうな顔してるもんな」

「・・・いらっしやい」

店主の声に振り向くメトロンとスーツの客。

「おやじ、いつもの」

入ってきたのは胴長の・・・どうみても地球人ではありません、あるいはとうございました

「ゼットン星人の旦那じゃないか。随分やつれてるが、どうしたよ？」

「ヘッ」

「いや・・・ちょっとショックなことがあってな・・・。ん？そつちのスーツのあんた、どつかで・・・」

「シユッ？」

「・・・まあ、気のせいかな」

「で、旦那、何があつたんだ？」

「実は、ペットに逃げられてな・・・餌をやり忘れてあの始末だよ」

「そりゃ逃げるさ、あんた元々動物に当たるの多いだろ？」

「シユア」

メトロンの言うことに頷くスーツの客。

「それは・・・そうなんだが・・・」

「自由にしてやんな、そろそろ」

「いや、それだと問題が・・・」

「ヘッ？」

「何なんだ？」

「そのペット・・・1兆度の火の玉吐くんだよ・・・」

「へ・・・」

「ヘアアあ！？」

硬直するメトロンの、思いっきり”何かを思い出したかのように”
仰け反るスーツの客。

「・・・早く見つけないとヤバいんだよ・・・」

ちなみに1兆度というのは宇宙を生んだ大爆発、ビッグバン発生
の直後の温度です。

「・・・すまない、今言ったことは忘れてくれ」

「・・・よし、俺は何も聞いてない」

「・・・シユワッ」

無かったことにした三人であつた。

エピソード的な何か

「・・・ん？んー・・・」

深夜、何となく目を覚ました。・・寒っ！？

何でか布団の感覚が無い。

・・起きて隣を見る・・あれ？

「バルタンが・・居ない？」

照明をつけ、部屋を見回す。するとすぐに、寒気の原因は見つかった。

「・・・・」

丸まった布団が、ちょっと離れたところに有った。

「・・・・ハア・・」

・・俺は丸まった布団を、ひつぺらがした。

「おいバルタン、風邪がぶり返したらどうす・・」
バツ。

「・・・・」

「すー・・」

・・・・だ・・

ダレダオマエワ！！

第11話 あなたの風邪に狙いを決めて（仮）（後書き）

正直なところ、セブンより80、80よりガイアが好き、シヨナサ
ンです。

今回は次回予告とかはありません、というかあることすら定かでは
ありません。

第12話 宇宙猫ゼットン登場（前書き）

言い忘れていましたが不定期更新です、ジヨナサンです。

第12話 宇宙猫ゼットン登場

ダレダオマエワー!!

「すー・・・(ピポポポ・・・)」

俺の布団をむしりとって、それは眠っていた。

何これ。何ですかこれ奥さん。

角生えてるし光ってるしポポポ鳴ってるし。

丁度その時、ジャーツ、と水音がトイレの方から聞こえた。
ガチャ。

「あー、スツキリしましたー・・・何ですかこれ!？」

トイレから戻ってきた様子であるバルタン。

「その台詞、お前にも十分当てはまると思っけどな・・・お前が何かしたんじゃないのか？」

「違いますよ!・・・でも、こんな可愛い猫はつい連れて帰っちゃうタイプですが」

「猫!?これ猫なの!？」

「猫ですよ、よく見てくださいよ」

どう見たらこれが猫に見えるのだろうか。

角生えてるし光ってるしポポポ鳴ってるし。

「ほら、鳴き声も」

耳を澄ましてみる。

「すー・・・ゼツ・・・トーン・・・すー・・・(ピポポポ・・・)」

はい、怪物確定!

角生えてるし光ってるしポポポ鳴ってるし!

「とりあえずバルタン、捨ててきてくれ」

「む、無理です!こんなかわいい猫捨てられませんよ!」

「万に一つこれを猫だとしても絶対に可愛くない!」

それに俺はお前という生き物を飼っている！これ以上俺の平穩を・
」

「・・・ペットじゃなければ飼ってくれるんですね？」

「え？」

「分かりました。それは後日何とかします」

何とか・・・って？

「・・・あ、起きましたよ」

「・・・？」

周りをキョロキョロ見回す猫（暫定）。

「可愛いですねー・・・なんて言う種類でしょうか」

もう猫で決定らしい。

「・・・ゼットン（ピポポポ・・・）」

「・・・」

「・・・次郎さん、この子ゼットンっていうらしいです」

ト。ロかよ。あなたト。ロって言うのね的な感じで言うな。

「ぜつとーん」

そのままト。リのト。ロのどこかで見たようなシーンに。

バルタン星人とゼットン（仮称）が行う姿はシールドを通り越している。

「ねえ次郎さん、飼ってください」

「駄目だったら駄目だ」

「・・・」

ん？ゼットン（仮）がこちらを見ている・・・

ててててててててててて

なんだこのBGM!？どっかのチワワに見つめられるような物悲しいBGM!

目と目が合う　瞬間好きだと・・・

止める！この小説が載ってるサイトの意味で危ない！この小説が危ない！

おゝい　ゴッドマー・・・

止めると言ってる！・・・たく、このBGMはどっから・・・

バルタンのハサミ「愛してるゝ　ホントn・・・」
ガシャン。直ぐに俺はバルタンのハサミを閉じた。

「お前が流してたのかよ！？」

「だって、飼いたいんですよ」

子供か、お前は。

あと、ハサミ新機能発見。

「お願いします」

「ゼットン」

二人（？）で俺に正座で頼み込む。と言つかゼットン（ry）はどう見ても胡座をかいている。

「・・・」

「でないと僕、出てっちゃいますよ？」

「どーぞどーぞどーぞ」

「なんで喜んでるんですか！？」

「だって実の所不本意だし」

「・・・可奈さんにそっぽ向かれますよ?」

うぐっ! お前、人の妹を張り合いに出すとは・・・!

「次郎さん、ホントにお願いします」

「う、・・・」

元はと言えば可奈のこともあつてこいつを飼っている面がある。

正直妹にこれから無視されると思うと痛い。

コンプレ的な意味じゃなく。普通に。

「っ あー! 分かった! 但し面倒はお前が見ろ!」

もう決定だった。

とあるおでん屋台

「シュアア」

スーツの客が、椅子に座った。

「お、来た。今あんたの話をしてたところなんだよ」

メトロンがおちよこを掲げ、会釈した。

「久しぶりだな、マン」

メトロンの隣に、スーツの客と雰囲気が似ている男が座っていた。

「シュワ」

客も手を上げる。

「隊長おひさ・・・って、お二人さん、どういう関係で?」

「私とこいつは兄弟のようなものだ」

「ヘア?」

「・・・ゾフィーさんよ、心外だつて」

「・・・ほう、マンよ、久しぶりに会う長兄にその態度とは・・・

「へッ！」

「やるか！？この何百体もの怪獣を倒している私に、ゼットンに負けた男が？」

「ヘアア！？」

「・・・何だか「一触即発」って感じがするな

「・・・おい、おやじが困るから表でやってくれよ・・・ったく、表に出ていった2人をよそに、とつくりを傾けるメトロン。」

「おやじ、大根3つ追加。若干焦げ付きで頼む」

「シユアー!!」

ビュッ！ ビュッビュッ！

「ま、まで、私が悪かった、だから八つ裂き光輪の乱れ撃ちはやめ・・・ぎゃあああああああ」

今宵も、あるおでん屋の夜は更けていく・・・。

第12話 宇宙猫ゼットン登場（後書き）

POMERAで全部書いてそのまま張り付けたのでどうか
分かりません。感想お聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5333u/>

バルタンがやってきた！

2011年12月1日20時52分発行